



1982年(昭和57年)
12月号(No. 450)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価一部 150円

目次

名誉会員・田中薫氏を悼む 佐々保雄……………(1)

原稿への招待
～「山」450号の機に～ 大森久雄……………(1)

海外の山から ダウラギリ主峰北西稜初登……………(2)

オーストリアの山岳団体 鈴木郭之……………(3)

東西南北……………(4)

会越街道開通、三田さんとの山歩き、会員通信……………(5)

図書紹介……………(5)

「アマとプロの差一二つの山岳写真集」、
「行ってみたい秘湯100選」……………(6)

科学委員会講演会……………(6)

「日本の山と断層」……………(6)

報告 岩登り講習会、紅葉会、映画、
図書交換会……………(6)

お知らせ 山日記編集委ほか……………(8)

会務報告・ルーム日誌・会員移動……………(9)

日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時

水、金曜 13時～20時

日曜・祭日は休み

図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日

13時～20時

ルーム正月休み

12月29日(水)～1月8日(土)

名誉会員・田中薫氏を悼む

佐々保雄

田中さんが逝くなられた。九月二十日のこと、全く突然であった。心筋硬塞だったと言う。

その三日後に、日本山岳会のルームで、パタゴニアに行つて来た北大の学生のスライドを観るのを楽しみにしておられた。そのことで札幌に打ち合わせの電話を頂いた翌日のことだった。彼地に赴く前、田中さんから何かとお教え頂いたもので、その成果をお聴き願う催しであったが、そこへの計報、信じ難かった。お年(八五歳)ではあったが、まだまだご存命で、沢山お話をうかがつておきたかったと思つてゐる。

田中さんは一八九八年(明治三十一年)、日本の湖沼学の開祖、田中阿歌磨博士の長子として、東

京に生れられた。東京高師の附属中学で、当時の氷河論争―日本に氷河があったか否か―の渦中の一人、大関又五郎先生に教わったことが、田中さんの一生を方向づけたらしい。山好きとなり、地理学を志し、後々まで氷河に興味を失われなかった。

大学では、人文地理学を専攻され、卒業後、神戸高商、後の神戸大学に最も長く勤められた。講義は経済地理で、アメリカ、ラテンアメリカ、東南アジアの経済地誌に多くの貢献がある。神戸大では山岳部や庭球部―近くなられる三日前も元気でラケットを握つておられた由―の指導教官をされ、多くの学生やOBに親しまれた。学位はラテンアメリカの経済地

理でとられたが、氷河地形についても、日本アルプス―天狗平の氷河公園はお好きな所だったとうかがった―、台湾、千島などの諸論文があり、朝鮮の冠帽峰のそれには、私との共著もある。それら山々の紀行は「氷河の山旅」にその一端を残された。

神戸大を定年で退かれてからは、成城大学に席をおかれたが、近年は夫人の経営される田中千代学園を助けておられた。

学者としては、地理学界の長老となられ、日本地理学会の名誉会員であったが、その活躍は国際的であった。国際地理会議には欠かさずに出ておられた。最近は一九八〇年(昭和五十五年)の東京での会議に奔走され、米国アイヴス博士の国際山岳学会の日本における世話役でもあった。更に、自然保護、国立公園、文化財保護などの諸委員を多年されていたことも見逃せない。

原稿への招待

「山」四五〇号の機に

大森 久雄

「山」が四五〇号になるので、編集経験者の立場から大至急何か書け、というのが担当の岡沢さんからの電話だった。こういう、せっぱつまった原稿依頼というのは私もさんざんやってきたから、どんな状態にあるのか、担当者の苦境もたどころに諒解できて、断わることはできない。四五〇号だから何か節目のあることをというのなら、他に適当な諸先輩がたくさんおられるのに、私にお鉢が廻ってきたのにはこういう事情があることをまずおことわりしてお

山をきれいに「山」は持ち帰る

く。定期刊行物の編集をしたことのある人なら、締切日を過ぎて突如ページに穴があいてしまえば右往左往する経験はだれにもあるはずだが、この「山」もまた柄は小さいがその点ではまことに堂々と一人前なのである。裏でどんな苦勞があろうと表に向かって言うべきではなく、またその苦勞の跡をとどめないのが、何ごとであれ仕事の鉄則だとしても、正直「山」の編集をやっていると、まったくウンザリして、放りだしたくなるのがあったものだ。第三種郵便の認可をとっているから、会員のための、という表現は使えないが、共通の場のはずなのに、ひとの苦勞も知らないでよくもまあ、そう勝手気ままなことが言えるものよと、あきれることがあった。私は職業が同じ編集だから似た経験は何千回もしている、JAC、お前もか、ぐらいのオドロキでさんだが、編集経験のない岡沢さんなど、眼を白黒させることが再三だったのではないかと推察する。

留守番電話(電話番号四一六六五九)

登山者としては、中学生の頃から山に入り始められ、一九一六年(大正五年)、日本山岳会に入会しておられる。会員番号は四四四で、その足跡はスイス、スコットランド、南北アメリカと広きに及んだ。その登山家としてのクライマックスは一九五八年(昭和三十三年)、日本・チリ合同のパタゴニア・アンデス探検隊を率いられたことと、この隊には本会の故高木正孝氏も登攀隊長として加わっており、この地域における日本人の初期の踏査者として、その後の登山・調査の先駆的な役割を果たされた。こうしたことについての功績で日本山岳会は、一九七一年(昭和四十六年)、名誉会員の称で報いている。

以上のように、田中さんは学識と共に視野も広く、活躍の場は多岐に涉った。専門上の必要もあったが、写真に関する傾倒も一方ならず一言言持たれ、「地学写真」や「東印度諸島」其の他の著書もある。また絵画もよくされ、スケッチブックは、カメラと共にいつも離されることがなかった。一方、千代夫人の民族衣装の蒐集にも協力され「原色―世界の民族衣装」其の他の共著がある。

このように、田中さんは学者としてのみならず、趣味も広範にわたり、その暖かい人柄のせいもあるが、交友も多かった。極めて内容の豊かな生涯を過ごされた方と

言うことが出来る。晩年はカトリックに入信され、精神生活をも高めておられた。

悲しく、惜別の情を禁じ得ないが、ここに今、田中さんの徳を偲びつつ深甚の哀悼の意を捧げ、ご冥福を祈る次第である。

海外の山から――

ダウラギリ主峰北西稜初登

一九五〇年代に始まるダウラギリ主峰の各主要稜登攀争いは、今秋のカモシカ同人隊(佐々木徳雄隊長)北西稜初登頂によってその完結を見た。時に、十月二十八日午前十一時二十分。登頂者は山田昇、小松幸三、斉藤安平の三隊員。

隊が登頂。また南東稜は七八年の群馬岳連隊、南稜(主状岩壁)は七八年のイエティ隊がそれぞれ初登に成功、以後このルートは余り採用されていない。

山田登攀リーダーは、同峰南東稜の群馬岳連隊(一九七八年)の登頂者であり、H A J のカンチェンジュンガ登頂(八一年)と合わせ三つの八千を登頂した。小松隊長は、ダウラギリ第二、三、五峰縦走を果たしており(一九七九年)、四峰の初登頂(七五年)と合わせ、ダウラギリ五山を一手にした「ダウラギリ」である。斉藤隊長はマッキンレー南壁の登攀があるが、四年を越す欧州アルプス登山経験が高度順化にも好成果をもたらしたろう。

主要稜初登頂をふりかえると、北東稜は一九六〇年のスイス隊(アイゼリン隊長)に始まり、同稜線からは同志社大隊を含めて八

北西稜ベアー・ルートは一九五三年のスイス隊が手がけ、五月二十九日ブラウン、シャッツが北西稜線下七四〇〇に迫って断念、ついで翌年、アルゼンチン隊が試み、例の爆破作業をベアー上部の七二〇〇の地点で試み、第六キャンプを設立したが、七五〇〇まで達してビバーク、翌日の悪天候に撤退を余儀なくされた。五七年を除いて、毎年スイス、アルゼンチンが試みたが成功しなかった。そして一九五九年のオーストリア隊の北東稜への試みが、六〇年のスイス隊のルート転進によって同峰初登につながっている。この隊はピラタス・ポーター機「イエティ号」を輸送に選ぶ画期的な手段をとったもので、ここでも最終キャンプは七八〇〇にまで上げ、第一、二次登頂を果たしたの

四〇〇号のときは私が編集担当で、四〇〇号を迎えて、という原稿を山崎(安治)さんに押しつけて書いてもらった。苦勞話はそこでエピソードをまじえて要領よく書かれていたから、ぜひ再読を願いたい。山崎さんは「山」の編集に関係するようになったイキサツを、大病がなおってぶらぶらしていたら渡辺公平さんにつかまっていたのが運のつきだと書いている。それならば私は、十何年も会う機会のなかった山崎さんがなぜか私の名を思い出したのと、近藤(信行)さんに膝づめで迫られて引きずり出されたのが私の運のつきであった。前記の文の中で山崎さんは「それから今日までつかずはなれずの縁となったが、多くの会員各位と知りあえるようになったのも、会報を編集していたおかげだと、ひそかに喜んで」と書かれているが、その点は私も全く同感で、私はむしろおおびらに喜び、さらに感謝しているともつけ加えた。

いまの「山」は、8ポイント活字で五段組、一行15字、一段36行(一ページ二七〇〇字)というのが基本だが、私が担当するまでは7ポイントという小さな活字でびっしりと組まれていた。私は新参の不良会員で、会報もあまり熱心には見ていなかった

から、担当となつてあわてたが、限られたページ数の中に多くの情報を入れようとすれば活字を小さくするのは当然で、それなりの意味は充分にあったと思う。しかし、高年令者に熱心な会員が多いという山岳会の性格を考えると、7ポイントではいかにも気の毒であった。最近でこそ新聞も本も活字を大きくしているが、一九七五年三五九号から、私は山崎さんの諒解を得て、活字の大きさと組体裁を、他の同種のものなみに変えさせてもらった。本当は、五段組ではなく四段組、しかも部分的に9ポイントとしたかったのだが、あまり急激に変えるのは好ましくないというので、いまの形に落ちついた。幸い、読みやすくなったという声が多く、不評を耳にしなかったのはありがたかった。

二年でいいからという話が結局四年になって岡沢さんと交替したのだが、たかだか12ページとはいえ、やはり毎月となると楽ではなく、前任の小倉厚さんもこぼしていたが、折角の晴天の休日に肝腎の山へ行かれないというなげないはめになることもあった。

山と人と本と、そのそれぞれに読みごたえのある原稿を寄せて下さった多くの方々にはいまでも感謝しているが、その反面最

である。しかし、このイエティ号は五月五日ダンブッシュ・パス付近で墜落したが、その黄とピンクの残がいまなお、色褪せることなく現場に放置されているというが、当時の開拓者の労苦を象徴しているようでもある。北西稜へは一九七六年のイタリア隊など、その後四隊が初登攀を狙って試みたが、七八〇〇に止まっている。

今回の隊はベアー上部、北西稜

上の七八〇〇に最終テントを設置することが、登頂の成否のポイントと見られていた。これらの問題も克服したものとみられるが、またポスト・モンスーン期を選んだことも成功の一因といえる。しかし九月二十四日の大雪で三人が第一キャンプからのルート工作中雪崩に遭遇しているが、いずれにしろ、今シーズンの日本隊が、K2北面とともに果たした足跡は大きい。

(片山全平)

オーストリアの山岳団体

鈴木 郭之

オーストリア山岳会(Der Österreichische Alpenverein)は、英国のアルパイン・クラブ(一八五七年)に続いて、ヨーロッパ大陸では、最初の山岳会として一八六二年、ウィーンで結成され、続いて一八六九年には、ドイツ山岳会(Der Deutsche Alpenverein)とオーストリア旅行クラブ(Der Österreichische Touristenklub)が生れるが、一八六九年、オーストリア山岳会とドイツ山岳会は合併し、ドイツ・オーストリア山岳会(Der Deutsche Österreichische Alpenverein)と呼称するようになる。一八八四年には、オーストリア山岳クラブ(Der Österreichische Alpenklub)が生れ、一八九五年には、自然の友旅行会(Der Touristen-

verein "Die Naturfreunde")が設立され、この他に、多くの小さな山岳会の連合体であるオーストリア登山家連合(Die Österreichische Bergsteigervereine)が結成されている。更にこれ等の団体を統合する機関としてオーストリア山岳連盟(Der Verband alpinier Vereine Österreichs)が一九五〇年より活動している。

オーストリア山岳会(Der Österreichische Alpenverein)

本部: A-6010 Innsbruck, Wilhelm Greil Straße 15 Österreich

一八六二年、十一月十九日、最初ウィーンで設立された山岳会で、ヨーロッパ大陸では最も古い歴史を持っている。しかし、一八七三年には、五年前に設立された下

イツ山岳会と合併し、当時のオーストリア・ハンガリー帝国並びにドイツ帝国内における最も大きな山岳団体となり、独逸山岳会として第二次大戦後の一九五〇年まで続くことになる。創立時からのモットーである「山岳に対する知識の拡充と普及」の精神に基づいて、主として東アルプスにおいて実際の活動を行なうとともに、数々の刊行物も出版してきている。

今日では、定期的な機関誌として「Der Bergsteiger」が月刊、「Alpenverein Heute」が隔月、また年間で「Jahresbuch」が刊行されている。

総会で選出された各支部からの代表に依って全機構が運営されるが、本部は三年ごとに、後になって五年ごとにドイツとオーストリアの間で交互に移し替えていたが、一九三八年のナチによるオーストリア併合以来、ドイツ山岳会の名称のもとに、本部は恒久的にインスブルックに移された。この当時、約四六〇の支部と二十万人の会員を数えていた。一九四五

年、戦争終結とともに、連合軍は、オーストリア以外の地にある支部は強制的に分離されたが、山岳会そのものは解体されることなく「Alpenverein」という名称の下で存続されることになった。かくして一九五〇年になって始めて、オーストリア山岳会の名称となえるようになった。一九七八年五月現在で、一六三の国内支部と四

も困ったのは、冒頭の件とも関係するが、依頼した原稿が来ないことだった。タダなんだから仕方ないとも思えたが、記録にとどめておかなくとも意味をなくしてしまうたぐいのことで原稿がこず、結局何も記録が残らなくなってしまうこともあった。記録されなかったことは存在しなかったことと同じだという言葉もある。内外の山や壁に新ルートをひいたり、新方式を編み出した、あるいは貴重な行事を骨を折って開いたりして、意味をなさなないことは、かつてのヴァイキングとコロンブスの関係をみれば明らかである。

そのほか、せっかく新しい欄をつくってみても、さっぱり原稿がこないのです。その欄の登場する機会がなくなると、突然、

つての外国支部(ベルギー、デンマーク、英国、オランダ)をもち、会員数は二十万七千人、山小屋はオーストリアの山で約二八〇を有し、一万三千五百人が泊れるようになっている。オーストリア山岳会には、ガイドの養成にも力をいれ(一九六五年以来、オーストリア山岳・スキー・ガイド連盟(Der Verband der Österreichischen Berg-Schiffrer)があたりてゐる)、会員にガイドのあつても行なっている。遭難救助も一九〇〇年以来、

なんでもそういう欄をつくらんのか、という叱声がきこえてきたりするのも、何やらキツネにまつまされたようだった。

最近では自分の名前入りの原稿用紙をつくって、書くことがないのか便箋がわりに使うという人もいようだが、そんなことまでしなくなると、「山」用の原稿用紙はあるし、方眼紙だって使いようによっては原稿用紙になるのだし、文房具屋で原稿用紙も便箋も上質のものをいくらでも売っているのだから、オックウがらずにどしどし原稿を寄せていただきたいと思う。一九三〇年(昭和五年)からつづいている「山」は、「山岳」と並んで山岳会の主要かつ基本的な柱であり、外部からみてきわめて貴重な第一級の資料なのだから。

つき、一九六二年には、国際山岳連盟(Union Internationale des Associations d'Alpinisme 略 UIAA)に加盟している。会員には鈴々たる登山家が名をつらね、ちょっとあげるだけで、Peter Aschenbrenner, Mathias Rebitsch, Kurt Diemberger, Dr. Herbert Tichy, Ernst Senn, Toni Egger, Sepp Jochler, Wolfgang Nairz, Herman Buhl, Peter Habeler のようなきりがなく、特に一九七八年のエベレストの無酸素登山は世界の注目を集めたばかりである。

オーストリア山岳クラブ (Der Österreichischer Alpenklub)

本部: A-1060 Wien VI Getreide-markt 3 II/12

オーストリア山岳クラブは、一八七八年十二月六日、百人の若い山好きの人達によって Alpen Klub "Österreich" の名称のもとに結成され、一八八四年より現在の名称を使用している。英国のアルパイン・クラブを範として結成され、誰でも入れるというわけではなく、またすでに経験のある登山家の自由な集りということを重ねて、最初から大きな会としない方針であった。従って同時に他の山岳団体に加入している会員も多い。会員相互の親睦を目的として機関紙 "Österreichische Alpenzeitung" は、一八七八年一月三日に発行され、最初は隔週であったが、その後月刊となり、戦後は隔

月となった。一八七九年、三月、グロース・グロックナーの三四六四メートルのアドラースルエに避難小屋を建てることを決定し、一八八〇年八月十八日に開かれた。この山小屋は、アルプスの山々に理解の深かったヨハン皇太子を記念して、ヨハン大公小屋と名付けられた。その後改築を重ね、現在二百四十人が泊れる堂々たるものになった。その後、ウィーン小屋、チグモンディ小屋と建設したが、南チロルの国境帯にあったため、第一次大戦後は、ヨハン大公小屋だけになってしまった。ドロミテで有名なオットー・ラングル (Otto Lang) が会長の時、一九三八年、ドイツによるオーストリア併合で、クラブを解消するか、ドイツ山岳会の一支部として残るかの決断に迫られる。理事会は後者を選び、クラブを保持した。一九四五年、ドイツ山岳会の解消とともに再び独立し、一九四六年六月十八日に、長い間開かれなかった総会を開催した。続いて一九四七年に再び機関紙を発行するようになった。会員は現在約五百五十人くらいで、そのうちの二十五人は婦人会員である。一九七八年十二月には、創立百年祭の祝典をあげ、記念行事の一環として、会員であると同時に画家の E. T. コンプトン (Edward Theodor Compton) 意匠によるヨハン大公小屋の記念切手が出された。

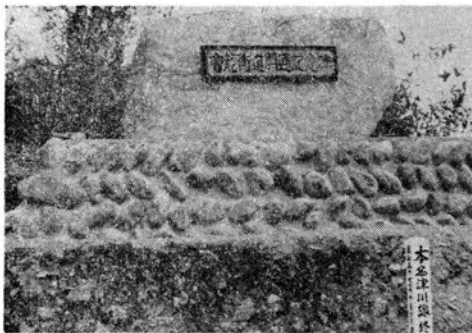


会越街道開通

豊島 洋一

奥会津、福島県金山町と新潟県東部、上川村の越後山脈を横断する峰越え連絡林道「本名一津川線」の開通式は、紅葉最盛期の折、快晴の十月十八日県境でテープカットされ、盛大に行なわれた。

この一帯は、一等三角点路ヶ



会越街道開通記念碑・撮影 豊島洋一

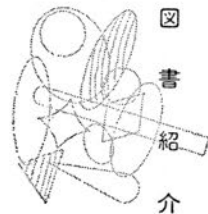
霧来沢沿いに三条林道を進み、三条部落より、三キロで左岸側より霧来沢を渡り、起点の大山田林道に入る。路面は荒れているが、しっかりした山岳の登坂路でこれを登りつめると、北に御神楽岳、前ヶ岳が真向いに黒く輝いて見える。

起点より六・五キロ程登ると右側には丸立木の導標のある幻の滝遊歩道である。大山田沢近辺は滝の多いところだ知

森山(一三二五)と、と日尊ノ倉山の中央鞍部が峰越えで、御神楽岳(一三八六)を始めとする一三〇〇級が連座する秘境である。頂上には「会越街道」の林道名を刻んだ黒みかげ石の記念碑が重々しく置かれ、幅員四メートル、延々四十一キロ、会越県境の豪雪と闘って三十有余年、難工事の末の大林道完成にふさわしい。

連絡道は福島側、五十五年度、新潟側、五十二年度に着手し、七・四キロの最後の工事を行なっていたもので、今後、林業生産、観光産業、文化の交流発展に、また第三ルートの働きかけとして地元に大きな期待が寄せられている。簡単にその概要を記述してみたい。福島側は金山町、本名発電所から林道を経て三条部落に入る、御神楽岳への入山道である。

図 書 紹 介



アマとプロの差

二つの山岳写真集

一九四六年生まれの若い写真家麻賀進氏の『尾瀬夢幻』は、その名の通り尾瀬の四季をつとめてリリカルな趣でとらえた写真を集めている。快晴の日の大展望を見せる作品は一点とてなく、雲一つない空の下、初冬の光景は、池の水面上にうつった姿として登場する。俗にいう絵葉書的な写真に対する逆説的な作品の群とでもいったらよいか。植物にしても、説明を目的とした大写しはない。約七十点のカラー写真は、いずれも絵画的な感覚に裏打ちされている。雨につけ霧につけ、それらは写真に対する障害ではなく、いわば絵具同然に活用される。

写真と印刷の技術が向上するにつれて、シャープな切れ味がつままる一方の山岳写真の世界で、麻賀氏の、このような、叙景的というよりは抒情的な作品は珍しい。山登りにカメラをたずさえる人は写真による表現の可能性をひろげるために『尾瀬夢幻』をひもといて

てごらんになるとよい。

リリカルと形容はしたけれども麻賀氏の尾瀬写真集は、数多い写真家たちの群のなかに埋没されまいとして、精一杯に自己主張をしようとしているプロの作品集である。小久保善吉氏の大規模な写真集このかた、尾瀬はくりかえし写真にとられてきて、おおかたとりつくされた観がある。そのような場所、月並みに過ぎずに新境地を拓くに並大抵ではない。芸術至上主義の一人よがりではなく、自然の情緒をメッセージとしてつたえることに成功しながら、プロらしく自己主張してみせているところに、写真集としての『尾瀬夢幻』の魅力の源がある。

「写真集としては」と書いたのは、わけがある。巻末につけられた。植物の分布や開花期を示す図表は本体である写真集と関連性にとぼしくて、一冊の書物としてのハモニーを乱しているように思われたからで、少々気にかかる。

若いプロ写真家の尾瀬写真集と好対照をなしているのは、一九一二年生まれの日本山岳会々員、小林太刀夫氏の『山の写真集』である。およそ五十点の山岳写真は特定の地域を一貫した感覚でとらえようとするのとはまったく逆に、撮影者自身の行く先々の記録であり証拠でもある。北岳の頂上での写真があるかと思えば河童橋からの焼岳があり、五竜岳での春山の

他の雑木は真盛りの紅葉であつた。

大久蔵林道を下り室谷部落までは二十二キロ、途中室谷洞窟や、十月二十二日に国の史跡に指定された小瀬沢洞窟などには石器時代の遺跡が多くある。輝かしい峰越え林道の完成をもって私達の山行も一つの区切りを迎える。地元として書きたいことは沢山ありますが割愛させていただきます。

(越後支部)

三田さんとの山歩き

三田幸夫さんとの小さな山歩きが、われわれ仲間の年中行事となってきた。一九八二年は三田さんが初夏の北海道に長逗留されたので、秋も終りに近い十月末に、ようやく夜叉神峠へ出かけた。

総勢七人の平均年齢が七〇をいくつか超えるのも、トップの三田さん、それに慶応山岳部で同期だった小室雅夫さんともに一九〇〇年生まれとあればうな

ずける。したがって織内信彦、小原勝郎両君あたりで中堅、金坂一郎、太田敬の両君は若手という順になる。車の運転から諸事万端が、この若手二人に委ねられるのだから、年功とはあり

がたいと思う。

夏の猛台風のツメ跡なまなましい芦安付近を、どうにか通り抜けたので、あとはのんびり黄葉の道をたどって、日没前に峠に立てた。この十月二十九、三十の両日白峰三山は薄雲一つまとわず常に眼前にあって、欲をいえば雪化粧のなののが惜しかった。小屋の夜は十三夜の月光がまぶしいほどであった。

帰りは葦崎へ出て、三田さん推奨のそばを味わった。たまたま、その店の近くに、数年前、木暮祭の帰りに宮下啓三君の案内で訪れた山寺仁太郎さんのお宅を見つけた。山寺さんは本会会員だし、地元山岳会として伝統のある白鳳会の元会長でもあり、三田さんとも面識があるので、早速これを報告した。その話を耳にして、そば屋の主人が電話しようというといひ出す。まもなく当の山寺さんが驚き顔で現われ、三田さんとも久闊を叙せられたのは、好ましいハブニングだった。山寺さんからは郷土の同人誌『中央線』の惠贈を受けた。年二回刊行で今や二十一号に及んでいる地方文化誌である。

この山歩きのと二週間ほど経て、三田さんから絵葉書がといた。めずらしく文面は英語で、結びには「Expecting you will please make further plan in early next year.」と記されていた。さて、次回はどこにしますか。

(一九八二年十一月二十日 島田巽記)

会 員 通 信

秋たけなわの爽やかな季節となりました。自然を愛する中、高年紳士も、会社勤めと休日には土の文化(農作業)に励み、貧乏ひまなしで、JACの諸行事や講演会にも出ず、勿論高い山々にも行けず沈滞で残念に思っております。

ところで、昭和五十五年八月二十日にサンケイ新聞の『私の意見』に「夏山の軽視は最も危険」が掲載されて以来、各分野を書いた意見やエッセイが、朝日新聞、読売新聞、サンケイ新聞に掲載されましたが、本年九月二十八日に朝日新聞「声」欄に採用されて、遂に二十一回となり、更に十月四日の読売新聞(日刊、全国版)「私の主張・私の提案」には「冬山登山、周到な準備を」が採用掲載され、二十二回とその回数を伸ばしました。

神奈川県津久井郡の山間地にある田舎町で頑張っております。皆様の健康をお祈りいたします。

(松岡 繁)

雪景色が、東京の裏山というべき二子山と同居していたりする。紙幣の図柄を自分の目でたしかめるかのような「五〇〇円札の富士山（雁ヶ腹摺山より）」など、いかにもアマチュアならではの風流心の産物である。

写真それ自体、いずれも美しく練達のできばえだが、自分の目に映じたものをなるべく大きな視野におさめて記念しようとする。作画技術に関しては自己主張がな

い。目に映じるままをカメラに大事におさめておこうという、純な旅人にふさわしく、すがすがしい記録写真集である。この場合の記録とは、小林氏の六十歳代の山行の記録という意味でもある。昭和のはじめに一高の旅行部に属して以来、東大医学部教授の職を辞してからもなお、嘗々と山に登りつづけてきた小林氏その人の、老いを知らぬ足跡の記録である。プロであつたら絶対につけなからうは

ずの「山の写真集」というタイトルが、この場合にはまことに当を得ていて妙なほどである。プロの自己主張とアマの自在さを比較しながら味わいぶかく二冊の写真集を見終えて、私は心なごむ思いであった。

『尾瀬夢幻 麻賀進写真集』
誠文堂・新光社二八〇〇円・小林太刀夫「山の写真集」中央公論事業出版 非売品
(宮下啓三)

科学研究委員会 第十四回講演会

「日本の山と断層」

講師 筑波大学地球科学系

小野 有五氏

日時 昭和五十七年七月十六日(金)

ルームにて

今年度の科学研究委の探索山行では直下型地震にも関係のある断層地形をテーマに取上げることに、十月十六、十七の両日、関西支部の協力を得て比良山に出かけることになった。

本講演はその予備知識ないし興味を深めることを目指して開かれたものである。

出席者(順不同) 遠藤光男、麦倉啓、中島学、高田真哉、菅野弘章、川澄隆明、浅野孝一、清水長直、柳田誠、中村あや、高橋詢、千葉重美、神谷光昭、小野有五、齊藤かつら、梅野淑子、小西奎二、前田文彦、中村純二(中村純二)講演要旨 山はなぜ高くなったのかという問いは、地球科学の根本的な問題の一つである。最近の地球科学では、地球の表面をとりま

ている岩石の層(地殻)が、大きな割れ目にそって何枚かのプレートに分かれていてと考えられるようになった。プレートというのは薄い板のことである。ちょうどパズルのように、地球表面の地殻は何枚かの板が組合わさってできているわけである。この考え方にたつと、日本列島は世界最大の太平洋プレートの西のはじにあつて、このプレートが西に少しずつ移動しながらアジア大陸のプレートにぶつかり、そして日本海溝のところで沈みこんでいく場所に位置している。隣りあうプレート同士がぶつかりあうところでは地殻に沢山の割れ目や断層がつくられるので、そこでは火山活動が活発で地震も多い。日本列島の山々は、まさにそうした地殻変動の激しいところ(変動帯)にそびえているのである。

断層のあるところでは、それを境にして両側の大地が違った方向に動いている。これが断層の運動である。断層を境にして土地が上昇(隆起)したところが高い山になるわけで、こうしてできた山を断層山地という。日本の高い山岳は、火山を除けばみな断層山地であるといつても過言ではない。

行って見たい

秘湯一〇〇選

美坂 哲男 著

この本は山と直接関係はないが、山に登った後、山麓の温泉で汗を洗い落し、さっぱりとした気分を冷いビールを飲むといった山登りをする者にとって大変有難い本である。特に著者が古くからの本会会員でその辺の事情を熟知しているの、選り出された温泉に

も抵抗なく浸れそう。読むうちに温泉の方へ行ってみたいくなるのが「山」という題の付いた会報の手前、欠点といえば欠点と言えるかもしれない。これも日本にだけ見られる山登りのカタチだろう。北海道から九州まで一、六五四箇所を巡った末の一〇〇選なので一冊持っている、この手の山登り屋にはいたって便利である。昭和五十六年十月・家の光協会刊 九八〇円 (岡沢祐吉)

報告

岩登り講習会

小原 晴子

今年は八月の台風10号を始めとして、週末の度に台風や、前線停滞に見舞われ、山歩きには物足りない夏でした。

山岳会入会以来、心待ちしていた岩登り講習会(第一回 十月九日・十一日)が小川山と知り、早速申込み、九月二十八日、準備会に出席しました。

指導委員長松永敏郎氏のお話では身仕度の数々の注意を始め、ひと通りのザイルワークを習い、最近の用具のエイト環、ナッツ(ワイヤーの先に角砂糖のような金具がついている)の大小いろいろ、それにフレンズ(かざ車の半分のようなもの)が、二、三枚ついていて、その大きさは、1、1.5、2、2.5、3、3.5、4と七種類ぐらいあ

る)等を見せて頂きました。近頃は頂上到達のためのクライミングと言うより、険しい岩に登ることを目的とし、岩にピトン等を残さず、回収し易い、ナッツやフレンズを使う方法が多く、特にアメリカでは利用されているようです。

現地第一日(九日)は生憎の小雨、机上説明の後再びザイルの練習に。ボーライン、ハーフクローブリッチ、エイト環を使つての下降の方法等、久しぶりに真剣に受講しました。

第二日(十日)は快晴に恵まれ、私共C班は「がま岩」の三〇ほどの岩に登ったり、懸垂下降したりして、午前中は六、七回上下して岩になじみました。

午後、取りついた岩は、上部がいささかオーバーハングをしていて、打たれたピトンに体をまかせ、腰の高さの、左横の方の岩のこぶに、左足を一杯のばし、右指の第一関節に物を言わせ、全身に力をこめて、大変な緊張と、思い切りで体を持ち上げ、更に左側の岩にあるカラビナに力を入れて、岩棚に顔が出た時は「ここで油断としては大変、もう一息」と気を引き締めたりで、真剣そのもので

した。このような岩を三つやり、向かい側にある金峰山の紅葉のまっ盛りの美しさを愛でる間も惜しんで、エイト環を使って最後の懸垂にかかると。

四〇分の下降では息をのむ緊張感と精神集中により岩の楽しさと醍醐味を満喫し、夕暮の山荘へ向かって帰途につきました。

第三日(十一日)は小雨降る肌寒い朝で、講師の白石一良さんと

日本の高山の大部分は日本アルプスに集中している。そして日本アルプスをつくる飛騨、木曽、赤石の山脈は、フォッサ・マグナと中央構造線という、日本列島を東西・南北に分ける二つの大断層に沿ってそびえているのである。フォッサ・マグナというのは大地溝という意味で、大糸線、中央本線に沿って連なる北城盆地、松本盆地、諏訪盆地、甲府盆地などの盆地群は、この大断層によって地盤が陥没した部分に相当している。反対にフォッサ・マグナの断層によって隆起したのが飛騨山脈と赤石山脈で、断層に接する常念山脈や後立山連峰は、これらの盆地の西側に、断層によってできた急な崖(断層崖)を屏風のようにそびえ立たせているのである。断層崖の高さが最も大きくなるのは甲斐駒ヶ岳のあたりで、黒戸尾根の登高が辛いのももっともなことと言わなければならぬ。

正断層というのは、山が高くなる時に、低い方の地盤がずり落ちるような運動をする断層であり、横ズレ断層というのは、断層に沿って両側の地盤が水平的にずれて食い違う断層である。飛騨山脈は、フォッサ・マグナ、跡津川断層、阿寺断層などに囲まれているが、後の二つは日本でも有数の横ズレ断層として知られている。日本列島の山々はたかだか三千メートルの高さしかないが、いま太平洋の水を消し去って考えてみると、日本の山岳は深さ六千メートルの太平洋の底から、九千メートルの高さにそびえていることになる。否、深さ一万メートルを超える日本海溝の底に立つてみれば、それはヒマラヤをしのぐ世界第一級の大山脈であると言える。

日本アルプスやヒマラヤ山脈が一体いつから現在のように高くなったかについては、実はまだよくわかっていない。ヒマラヤもまた、アジアのプレートとインドのプレートとの境界にできた山脈であり、そこにはいくつもの大きな断層が知られている。断層と山との関わりを調べていくと、日本アルプスはヒマラヤにつながり、そして世界の山々の生い立ちにつながっていくのを感じることができる。

なお夕食のインド貴族風カレーも、牛肉オイル焼も大変美味で、朝食のかやく御飯の炊き方も良く感じました。

お世話下さった指導委員会、青年懇談会の皆様に厚くお礼申し上げますと共に、是非このような講習会を毎年続けて下さるようお願い致します。

第二十五回

紅葉会

静岡支部

連日の秋雨で心配していた天候も暖かな秋日和の当日を迎え、定刻、静岡駅から貸切バス、自家用車で秋晴れの安倍川を一路、井川に向け出発。自然保護委員会に参加の会員は、井川少年の会上手の林道で下車、会議場へと落葉を踏んで明るい林を下る。会議に不参加の会員はバスで、井川峠方面へ延々と続く林道を、県民の森へと向かう。



第25回 紅葉会にて・撮影 関口周也会員

たがい、佐々会長は正座して居睡る特技を見せられ、代って夜の会長に斉藤健治氏が選出される。

懇親会場から移した、ビール、ウイスキー、日本酒も遂に飲み切れず、翌日に残る。夜の名会長、斉藤健治氏のお人柄と縦横無尽の話題で大いにムードが盛り上がり、就寝時刻のすぎたのも忘れるほどのにぎわい。

翌朝も雲一つない快晴。朝食後記念写真。畑薙ダムへ向かう者、接阻峠へ行く班、三ツ峯、七ツ峯へ登るパーティを送り出して、大多数は落葉の積る大日峠へ向かい、魔道に近い旧大日みちを口坂本温泉へと下る。神経痛、関節炎に特効の温泉で軽く汗ばんだ体を洗って中食。定期バス始発の六番まで、マイクロボスでピストン輸送。二日間の快晴に満足して四散。参加者 笹々保雄、中村純二、中村あや、錦織保清、佐藤佳年、近藤信行、佐野敏郎、長島吉治、荻野恭一、望月福次、川上光久、金沢喜八、松

お知らせ

☆『山日記』'83年版(第48輯)

刊行のご案内

日本山岳会の伝統ある出版物のひとつ『山日記』の'83年版(第48輯)がこのほど出来上がりました。いつもの通り赤いジャケットをはおっての登場ですが、内容は今年も編集委員の努力によってかなり工夫をこらしています。

昨年版は全体のトーンをやさしく「山の花」と

本懐太郎、矢沢義弘、渡辺嘉男、川北仁、森本勇治、仲西政一郎、石間信夫、青木昇、綱倉志朗、杉本宣明、池上和男、市野弘、磯野兼二郎、山崎健、中保、安土武夫、安土静江、鶴見敏彦、浜野正男、浜野泰子、稲垣一郎、鳥居亮、川端信治、西郷正郎、小野利次、岡沢祐吉、三上智津子、草野洋一、入谷浩吉、広羽清、関口

開拓期の黒部溪谷映画会

——別宮元会長の遺作から——

〔十月二日(土) ルームにて〕

フィルム委員会

五十三年前の黒部の秋が、ルールのスクリーン上に再現した。オリオ谷、阿曾原谷、十字峽、神潭、そしてその中を行く昭和初期の登山者たち。今は湖底に眠る黒部の姿がこのフィルムに記録されていた。

第八代会長・別宮貞俊氏が、昭和四年十月に撮影されたものであ。同行は故岩永信雄氏。この貴重で、映画会にはじまった。

周也、渡辺正臣、池田剛、松本恒広、関塚貞亨、荻原賢司、山本良三、岩永安雄、中谷絹子、遠藤光男、国見利夫、小川務、小林清彦、斉藤かつら、高沢英雄、山田透、河合俊男、鈴木統、桑畑茂、斉藤健治、野島福三郎、石坂久忠、沼倉寛二郎、山本朋三郎、井川山岳会十五名、合計八十一名。(山本朋三郎)

しましたが、今年は基調を大きく変えてストーリーに「登山活動」そのものに絞ってみました。つぎに、48輯の内容をやや具体的に紹介致します。

■口絵 映画「穂高岳讃歌」の製作者、神憲明氏に依頼して、かわいい「山の小動物」を3点。(説明も同氏に)

■日記欄・予定欄 各頁に自然保護の標語や山岳図書にあらわれた山に対する先達の名言を例年通り入れましたが、'83年版の特色は、既におな

スクリーン両脇にコースの略図が掲示され、画面の理解に役立てられた。「このシーンは現在の湖の底」という想いも観客の胸を打つ。

上映されたのは、「黒部の秋」二巻(昭和四年撮影)のほか、中の湯での「スキーツアー」(昭和四年)と、「真川より黒部川」(昭和六年)、「剣沢入り」(昭和八年)の計五巻、上映時間約五〇分であった。

映画会終了後、ささやかな談話会が開かれ、往時の登山姿やスキーツアーの思い出、画面にあらわれた場所や別宮、岩永両氏の話題に花が咲いた。

フィルム委員会は発足後まだ日が浅いが、前記のフィルムをはじめ、数かずの貴重な山行映画、スライド、テープなどの整理・保存の作業が進行中である。そして、こんな楽しい有意義な映画会を年に一・二回は開くことを計画している。

映画やスライドをお持ちの方で、山岳会に保存させようか、とお考えの向きがあれば、フィルム委員会ではよこんでお受けする体制が出来ている。どうかご相談を。(内藤俊夫)

図書交換会

図書委員会

恒例の図書交換会が十月二十三

日午後、ルームで開かれました。準備の当初は出品数が少なく、ヒヤヒヤしたのですが、終盤になつてぞくぞく集まり、和書五六点、洋書三六点、雑誌一四二点のほか、かなりの数の「十円均一サ―ビス品」をそろえて、例年なみの「店」をかまえることができた。出品してくださったのは吉阪隆正氏ほか三十名の方がた。

いわゆる稀覯本は見あたりませんでした。が、なんとなく欲しくなる本を五〇円、一〇〇円で買えるのが今回の特長で、比較的高いものといつても、武田久吉「尾瀬と鬼奴沼」の五〇〇〇円(購入希望者七名で最高、大島亮吉「山一研究と随想」やフランコ「マカルー全登頂」の四〇〇〇円ぐらいのもの。参加者はみんな、両手いっぱい本をかかえて帰られました。それでも総売上げは三四万六〇八〇円。規定どおりルームと図書委に一割ずつ、基金としてご寄附いただきました。

なお、今回の入札本は、島田巽氏の近著「遙かなりエヴエレスト―マロリー追想―」の限定三〇部特装本の、世にこれしかないという番外本二冊。底値八〇〇〇円のところに十名が入札して、二冊ともそれぞれ三万円で落札されました。

図書交換会も十五回目になり、だんだん参加者の顔ぶれが固定する傾向にあります。これではつま

じみの宮下啓三氏によって、登山の計画から実行、記録までの一連の登山活動をイラスト化して並べています。

●天気図・方眼紙・白紙はやはり山での記入に便利のため、いつもの通り入れました。

●登山のために(参考読物)

●巻頭言 山と人の間(日本山岳会副会長・渡辺兵力)

●楽しい登山をするために(横山厚夫)

●山を美しく保つために(フィールドマナー・ノート(案)) (日本山岳会・自然保護委員会)

●登山の装備―その選び方と使い方について(松永敏郎)

●山の医療(中島道郎)

●山と気象―山岳気象と気象情報の活用について(庄司亮)

●日本登山略史(山崎安治)

●登山便覧

●山小屋一覧・登山行程表・交通機関連絡先一覧

●山小屋一覧

●山小屋一覧

●山小屋一覧

●山小屋一覧

●山小屋一覧

●山小屋一覧

●山小屋一覧

●山小屋一覧

●山小屋一覧

●山小屋一覧

●山小屋一覧

●山小屋一覧

●山小屋一覧

●山小屋一覧

●山小屋一覧

●山小屋一覧

●山小屋一覧

●山小屋一覧

●山小屋一覧

●山小屋一覧

●日本の山と三百名山・登山地図・案内書・五万分の一・二十万分の一地形図一覧・剣岳と谷川岳の登山規制条例・177で開ける天気予報サービス局・山岳保険・日本山岳会本部支部一覧など三千通にのぼるアンケート調査によって最新情報にさし変えてあります。

●裏表紙・見返しなどに

●常用計量単位・各地の日出、日入時刻表・七曜表(森下博三)・山の高さ、水の沸点と気圧の関係・植物季節、NHK全国ラジオ放送局周波数など昨年版と同じく改訂掲載しました。

●内容は以上の通りですが、定価は前年と同じく一四〇〇円に据え置きました。どうか会員各位ならびに山を愛する人々の山行の友に、あるいは友人、恋人へのクリスマスプレゼント、入学・就職祝などのものもろの贈答用に今年も大いに活用していただきたいと思います。

(山日記編集委員会 小倉 厚)

(山日記編集委員会 小倉 厚)

(山日記編集委員会 小倉 厚)

(山日記編集委員会 小倉 厚)

(山日記編集委員会 小倉 厚)

(山日記編集委員会 小倉 厚)

(山日記編集委員会 小倉 厚)

(山日記編集委員会 小倉 厚)

(山日記編集委員会 小倉 厚)

(山日記編集委員会 小倉 厚)

(山日記編集委員会 小倉 厚)

(山日記編集委員会 小倉 厚)

(山日記編集委員会 小倉 厚)

(山日記編集委員会 小倉 厚)

(山日記編集委員会 小倉 厚)

(山日記編集委員会 小倉 厚)

(山日記編集委員会 小倉 厚)

(山日記編集委員会 小倉 厚)

(山日記編集委員会 小倉 厚)

(山日記編集委員会 小倉 厚)

(山日記編集委員会 小倉 厚)

(山日記編集委員会 小倉 厚)

(山日記編集委員会 小倉 厚)

(山日記編集委員会 小倉 厚)

(山日記編集委員会 小倉 厚)

(山日記編集委員会 小倉 厚)

(山日記編集委員会 小倉 厚)

らないし、趣旨にもとりますので、ひろく会員の皆さまの参加を呼びかけます。

△参加者 順不同▽伊藤博夫、吉沢一郎、筒井稔、山崎安治、岩瀬皓祐、近藤保人、滝川清、村松紀夫、菅野弘章、加藤康一郎、松家晋、石川紀美、大森久雄、橋瓜幸達、越田和男、千葉保之、平井吉夫、鈴木茂、神谷博行、高田健夫、入澤都夫、野口末延、近藤信行、林清、広島三朗、河野悠二、斎藤健治、黒田正雄、中村小一郎、土井高夫、砂田定夫、山本良三、村井米子、平柳一郎、津田保太郎、泉久恵、織田沢美知子

(平井吉夫)

(平井吉夫)

(平井吉夫)

(平井吉夫)

(平井吉夫)

(平井吉夫)

(平井吉夫)

(平井吉夫)

(平井吉夫)

(平井吉夫)

(平井吉夫)

(平井吉夫)

(平井吉夫)

(平井吉夫)

(平井吉夫)

(平井吉夫)

(平井吉夫)

(平井吉夫)

(平井吉夫)

(平井吉夫)

(平井吉夫)

(平井吉夫)

(平井吉夫)

(平井吉夫)

(平井吉夫)

(平井吉夫)

(平井吉夫)

(平井吉夫)

(平井吉夫)

国雪岳山登山、同朋舎発行、「日本登山記録集成」発行の件

●審議事項 山岳基金について、委員会連絡会議について

▽委員会報告主な項目、(1)山岳編集委では理事交替時期、その他問題を検討したい。(2)遭難対策、指導委では来年二月五日(土)に雪崩遭難シンポジウムは予定、(3)医療委は第三回登山医学研究会を開催予定、(4)フィルム委では鈴木正俊氏よりニイタカ山のフィルムを寄贈される。(5)学生部指導委ではボゴダ峰登頂報告。

11月理事会

11月8日午後6時30分

本会・ルーム

出席者 佐々会長、渡辺、田口副会長、伊丹、西村、神崎、田村、中村、小倉、高本、松家、岡沢、河村、赤松、菅沢、大倉、高橋各理事、小倉監事、小原評議員。

(委任) 水野、鈴木、川上各理事、太田監事、佐藤、大塚、松丸、村本各評議員。

●報告事項

▽秋田支部長の交代(岡田光行新支部長)、秩父宮科学々術賞、年次晩餐会準備、各委員会報告(科学、自然保護、図書、財務委員会)

●報告と審議事項

▽日本登山記録集成の刊行と故田中重会遺族とから二五〇万円の寄付をうけたので、これを別途会計積立金の扱いにしたい。この金

●報告事項

▽秋田支部長の交代(岡田光行新支部長)、秩父宮科学々術賞、年次晩餐会準備、各委員会報告(科学、自然保護、図書、財務委員会)

●報告と審議事項

▽日本登山記録集成の刊行と故田中重会遺族とから二五〇万円の寄付をうけたので、これを別途会計積立金の扱いにしたい。この金

●報告事項

▽秋田支部長の交代(岡田光行新支部長)、秩父宮科学々術賞、年次晩餐会準備、各委員会報告(科学、自然保護、図書、財務委員会)

●報告と審議事項

▽日本登山記録集成の刊行と故田中重会遺族とから二五〇万円の寄付をうけたので、これを別途会計積立金の扱いにしたい。この金

●報告事項

▽秋田支部長の交代(岡田光行新支部長)、秩父宮科学々術賞、年次晩餐会準備、各委員会報告(科学、自然保護、図書、財務委員会)

●報告と審議事項

▽日本登山記録集成の刊行と故田中重会遺族とから二五〇万円の寄付をうけたので、これを別途会計積立金の扱いにしたい。この金

●報告事項

▽秋田支部長の交代(岡田光行新支部長)、秩父宮科学々術賞、年次晩餐会準備、各委員会報告(科学、自然保護、図書、財務委員会)

●報告と審議事項

▽日本登山記録集成の刊行と故田中重会遺族とから二五〇万円の寄付をうけたので、これを別途会計積立金の扱いにしたい。この金

●報告事項

▽秋田支部長の交代(岡田光行新支部長)、秩父宮科学々術賞、年次晩餐会準備、各委員会報告(科学、自然保護、図書、財務委員会)

●報告と審議事項

お知らせ

●行事案内

☆八方尾根スキー山行 集会委員会

例年通り中央大学ヒュッテで、一月十四日
～十八日。会員懇談会もかねています。

☆三水会の二つの現地集会

・一月二十二～二十三日。新年会を新木鉱
泉で。そして比企丘陵の陽だまりを歩き
ます。・二月十九日～二十日。恒例の竹寺で薬湯
と山菜料理を探る集い。翌日はハイキン
グを行います。

☆第二八回山岳スキー技術講習会

三月十九～二十一日(二泊三日で小屋泊)
妙高高原で越後支部共催で行なう予定。今
日も医師、強力なコーチ陣、荷上げ専門の
支援隊がいます。定員三〇名。指導委員会

●会室行事案内

☆新年親睦会 一月十三日

海外委員会が行ないます。気軽に会室
下さい。

☆三水会例会 一月十九日

二月十六日

☆スイス山岳会情報 二月三日

宮下啓三氏の担当で海外委員会が行ない
ます。(六時三〇分より)☆高所登山における雪崩遭難シンポジウム
二月五日

高所委員会 司会 松永敏郎氏

☆会員懇談会 二月十五日

総務委員会

問い合わせは各委員会、または事務局、集会
委員会までお願いします。

「高所登山における雪崩遭難」

についてのシンポジウム

主催 高所登山委員会、遭難対策

委員会、指導委員会

一、期日 昭和五十八年二月五日(土)

一五・〇〇～一八・三〇 シンポジウム

一八・五〇～二〇・〇〇 懇親会(会費一

〇〇〇円)

一、発表者

(一)一九七九年チョモランマ峰偵察隊(日本山

岳会) 長谷川良典氏、横山宏太郎氏

(二)一九七六年アラスカ・フォーレイカー峰登

山隊(甲府昭和山岳会) 荻沢 剛氏

(三)一九八〇年インド・ブリックパント峰登山

隊(日本山岳会学生部) 今野善郎氏

司会 松永敏郎氏、総括責任者 金坂一郎氏

一、申込期日 昭和五十八年一月十五日

一、申込先 日本山岳会高所登山委員会川上隆

宛お願い致します。

会場のスペースの関係で、先着五〇名にて締
切りとさせていただきます。なお、懇親会にご
出席希望の方は、準備の都合がありますので、

「懇親会参加」と記して下さい。懇親会会費は

当日会場受付にて支払っていただきます。

参加者には、三登山隊の事故状況に関する、
簡単な資料を事前に配布いたします。当日は、

積極的な質問を期待いたします。

高所登山委員会担当理事 川上 隆

の運用は理事会でできる。了承

この件について、田口副会長より、

この金をJACの長期計画準備基

金の第一歩として、積極的に長期

計画を検討してはという提案あり。

了承

▽UIAA五十周年の集会への参

加報告(佐々木会長、多数の参加者

あり、有益なシンポジウムや興味

ある展示会が行なわれた。日山協

の要請でJACからも出品をし

た。UIAA役員からJACの再

加入の要請をうけた。検討を希望

する。

▽一九八三年、女子登攀クラブの

ブータン・ジチュドラク峯計画後

援の件の提案あり。了承

▽一九八四年、会員有志によるカ

ンチ全縦走計画の提案あり。了承

評議員会(11月10日)

出席者 松丸、細川、飯野、河野、

高遠、折井、片岡、望月、山田、

小原、大塚、辰沼各評議員、佐々

会長、渡辺、田口副会長

(委任) 朝比奈、木下、柴田、岸

田、西沢、蒲生、佐藤、村木各評

議員

議長選出 松丸秀夫評議員

●議案 定款第六條第五項による

名誉会員推薦の件

▽審議にさきたち、内規作成(昭

和四十年)前後の事情を望月評議

員より説明うけ、今回は評議員の

推薦を各評議員より行ない、それ

を参考にして、会長が候補者四名

第5回 ~83・<7/29(金)~8/12(金) 15日間>

ソ連・カフカスの山旅

○名峰エルブルース山(5,633m)登頂
○5,000m級の峰々のアルペンスキー等々

世界初 アルタイ山系の探訪

○最高峰ペルーハ(4,506m)登頂
○ハイキング等々。'83 7/21(木)~8/15(月) 26日間(株)日ソ旅行社 政府登録一般
第98号〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷1-20-1
パークアベニュービル

☎404-1751(代)

案内書

ルーム日誌

(57年10月)

2日(土) フィルム委映学会

4日(月) 理事会

6日(水) 集委韓国報告会

7日(木) 海外委、青年懇談会

13日(水) 図書委員会

18日(月) 高所登山委員会

を提案、野口末延、中屋健式、竹
節作太、麻生武治会員を全員一致
で推薦した。●提案 田口副会長が、一九八五
年の創立八十周年事業についての
準備の必要を提案。各種の意見が
だされ、基金準備委員会の発足が
賛成された。

20日(水) 三水
会

21日(木) 青年
懇談会

22日(木) 科学
研究委

23日(土) 図書
交換会

25日(月) 高所
登山委、委
員会連絡会

26日(火) 自然
保護委

27日(水) フイ
ルム委員会

28日(木) 青年
懇談会

今月の来室者
487名

会員移動
(10月)

物故
4035

前田 浩
(10・5)

5454
朝井一男
(10・6)

450
小島 栄
(10・19)

退会
1865

石原憲治

語句の正誤

会報47号8頁2段目真中辺にある「芽ぐぐり」は「芽ぐぐり」の誤り、48号8頁2段目左から7行目の「フ・イ・リ・ン・ゲ・ン」は「ハイリゲ・ン」の誤り、48号4頁カットの「古阪」は「吉阪」、9頁4段目の左右それぞれ1行目の「茸ぶき」は「茅葺き」の誤りですので訂正させていただきます。(編集)

あとがき 今回は前編集代表の大森さんに、四五〇号の出る機会に原稿を書いてもらいました。こちらの胸中を察してくれるには最もふさわしい人ですが、執筆者の名前や登場する人の名前を、元編集にたずさわった人々の名前に置き代えても文の意味が通じるのですから妙です。この大変な仕事もあと数カ月、頑張りましょう。(岡沢)

会費を納入して

下さい 事務局

昭和五十七年十二月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五一四

サンビュウハイッ四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 佐々保雄

編集代表 岡 沢 祐 吉

電話東京(281)四四三三

振替口座東京三二四八二九番

東京港区赤坂一丁目三番六号
印刷所 株式会社 枝 報 堂